

(2) 様式第9号 (報告書)

(独立行政法人教職員支援機構委嘱事業)

教員の資質向上のための研修プログラム開発・実施支援事業報告書

プログラム名	理論と実践の往還を実現する研修体制の構築 ～ミドルリーダー育成と教職を志す大学院生の意識向上を同時に実現する 対話的研修プログラムの開発～
プログラムの 特徴	<p>現職教員にとって、後輩の育成は学校教育の質の向上のためにも大切なことである。しかし、近年、学校を構成する教員の年齢構成が偏りをみせ、育成すべき若手教員がいないという学校も珍しくない。教員は後輩を育成することにより本人の職能をスキルアップしていくという面もある。また、これから教員を志そうという教職大学院生にとって、学校現場で働いている現職教員から、直接指導を受けるということは、学校現場の生の声を聴ける貴重な機会であり、現在行っている研究が、教育現場で役に立つのかどうか意見をもらえる良い機会である。</p> <p>上越教育大学教職大学院学生（以下「教職大学院生」という。）が公的機関で行われる研修講座に参加し、グループワークや検討会で現職教員と協議することにより、学校現場実践の経験に基づいた見方や、大学院での研究の理論に基づいた見方という2方面から対話することができる。そのことにより、現職教員は若手との接し方を学んだり指導方法などを考えたりして、大学院生は現職教員の仕事へ取り組む姿勢、現場での対処の仕方などを学ぶことをねらいとしている。</p> <p>講座の内容、グループワークの様子をビデオカメラ、ICレコーダーなどで記録し、講座終了後インターネット上で閲覧できるようにし、参加者が自分たちの活動の仕方、グループワークの流れや、全体の講座内容などをすぐに振り返ることができるようにする。</p> <p>特徴としては、記録した映像や音声を分析し、後日受講者にフィードバックして今後の教育活動に活かせることが挙げられる。</p>

令和2年3月

機関名 国立大学法人上越教育大学

連携先 長野県教育委員会

令和元年度 理論と実践の往還を実現する研修体制の構築



- 令和元年度の研究のポイント
- 1 研修講座の充実
 - 現職教員と大学院生の対話による相互の学びの充実
 - スマートフォンで講座内容を時と場所を選ばず振り返り可能に
 - 2 インターネットを使い双方向のフィードバックを実現し，研修の効果を詳細に分析
 - 3 研修方法を全国に拡散する

1 開発の目的・方法・組織

① 開発の目的

平成 26 年から上越教育大学教職大学院（以下「教職大学院」という。）と長野県教育委員会は連携・協力し、長野県総合教育センターを会場として教員研修講座を企画・運営してきた。研修テーマは、長野県教育委員会が長野県の教育課題から設定し、教職大学院が教育課題に即した内容で、理論と実践の往還を受講者に体験させることができる講師を選定してきた。両機関が連携し、長野県下の教員の資質向上を目指し、教職大学院における学びの具体化を図りながら研修を実施しているのが特徴である。これまで、長野県教育委員会と連携を図り、平成 28 年から 3 年間教職員支援機構の研修プログラム開発事業の採択を受け、研修事業を共同で行い、検討会を重ねることで、教職大学院と長野県教育委員会が抱える課題を共有することができるようになった。

長野県教育委員会の抱える問題点として、昨今の学校現場の年齢構成の偏りから、後輩の指導の機会が減っていることから、ミドルリーダー育成の手法開発が挙げられる。また、本学教職大学院においては、近年各県に教職大学院が設立されたため、本学への現職派遣数が少なくなり、学卒院生が現職院生から日常的に学ぶ機会が従前に比べ減っていることが課題となっている。このことから、学卒院生が現場の教員から学ぶ機会を増やす取り組みが必要である。現職教員の研修講座に教職大学院生と一緒に参加させ、互いにワークショップや討議などを行い、現職教員は、若手の考えを聞き、接し方などを学ぶ。そして、学卒院生は教育現場でのふるまい方、子どもへの接し方などを学び、学校現場を理解し、教員を目指す気持ちを固めて行くことを通して、相互理解を深める研修プログラムを開発することを目的としている。

② 開発の方法

3つの研修方法を実施し、それぞれについて質問紙、web アンケート調査等により検証する。

1) 対話的研修講座

長野県の教育的課題をもとに長野県教育委員会が設定した講座内容に対応できる講師を教職大学院が選定し、理論を中心とした講座を全 5 日の日程で開催する。そこに長野県現職教員の受講者と教職大学院の院生が参加し、講座内でのグループワークや講座後のリフレクションで協働的に課題を解決するなどの対話的な活動を行い、学びを深める。また、リフレクションでは、講座内容について理解を深めるとともに、グループワーク等での対話の仕方についても振り返ることで、相互理解を図る。

開発時期、テーマ、講師

6月21日：プログラミングに関する講座	大島崇行・片桐史裕・桐生徹
7月25日：道徳講座	早川裕隆・小宮健
8月5日：ICTの初歩の初歩講座	榊原範久・水落芳明
8月26日：学級経営講座	岡田広示・赤坂真二
9月17日：主体的・対話的で深い学びに関する講座	松沢要一・佐藤多佳子

2) 事後のフィードバック（講座ビデオによる研修）

上記「対話的研修」の内容をビデオ撮影し、公開可能なほぼ全ての内容を動画配信サイトにアップロードすることにより、講座受講者が研修後に研修内容を復習したり、同僚等に研修内容を伝える時に閲覧したりできるようにし、研修内容の定着を図る。

3) 出張拡散研修

長野県総合教育センター以外で行われる民間教育研修を含む全国教育研修会や学校校内研修会、学会に大学教員と教職大学院生が参加し、対話的研修講座で学んだ知見を元に、研修会に参加している現職教員と対話的研修を行い、各地の現職教員にもこの研修方法を拡散し、研修会参加教職大学院生の更なる意識の向上を図っていくこととする。

③ 開発組織

No	所属・職名	氏名	担当・役割	備考
1	長野県総合教育センター・ 所長	飯島 由美	教職大学院との連携担当	協議会副議長 協議会議長
2	同・指導主事	田中 聡	教職大学院との連携担当	
3	上越教育大学大学院学校 教育研究科・教授	西川 純	開発プログラムの総括担当	
4	同・准教授	片桐 史裕	研修講座の企画・運営担当	
5	同・教授	桐生 徹	長野県教育委員会との連絡・調整担当	
6	同・教授	水落 芳明	出張拡散研修の運営担当	
7	同・准教授	阿部 隆幸	対話的研修講座の運営担当	
8	同・准教授	大島 崇行	事後のフィードバックの運営担当	
9	同・准教授	榊原 範久	事後のフィードバックの運営担当	

2 開発の実際とその成果

①対話的研修講座

○研修の背景やねらい

長野県の教育的課題をもとに長野県教育委員会が設定した講座内容に対応できる講師を教職大学院が選定し、理論を中心とした講座を全5日の日程で開催する。長野県教育委員会の抱える喫緊の課題として、昨今の学校現場の年齢構成の偏りから、後輩の指導の機会が減っており、ミドルリーダー育成の手法開発が挙げられる。また、本学教職大学院においては、近年各県に教職大学院が設立されたため、本学への現職派遣数が少なくなり、学卒院生が現職院生から日常的に学ぶ機会が従前に比べ減っていることが課題となっている。このことから、学卒院生が現場の教員から学ぶ機会を増やす取り組みが必要である。そこで長野県現職教員の受講者と教職大学院の院生がこの対話的研修講座に参加し、講座内でのグループワークや講座後のリフレクションで協働的に課題を解決するなどの対話的な活動を行い、学びを深める。

また、リフレクションでは、講座内容について理解を深めるとともに、グループワーク等での対話の仕方についても振り返ることで、相互理解を図る。

○対象、人数、期間、会場、日程、講師 ※参加人数の（ ）内は参加大学院生、学部生数

研修項目	対象	参加人数	期間	会場	日程	講師等
1 プログラミングに関する講座	小・中・高・特等の教員	24 (6)	6月21日 (金)	長野県総合教育センター	10:10～12:10	大島崇行・片桐史裕
					13:10～15:10	桐生徹
					15:20～16:50	フィードバック
2 道徳授業づくり講座		12 (1)	7月25日 (木)		10:10～12:10	早川裕隆
					13:10～15:10	小宮健
					15:20～16:50	フィードバック
3 ICT初歩の初歩講座		35 (9)	8月5日 (月)		10:10～12:10	榊原範久
					13:10～15:10	水落芳明
					15:20～16:50	フィードバック
4 学級経営の評価と実践	27 (10)	8月26日 (月)	10:10～12:10	岡田広示		
			13:10～15:10	赤坂真二		
			15:20～16:50	フィードバック		

5 主体的・対話的で深い学びの授業づくり		17 (3)	9月17日 (火)	10:10～12:10	松沢要一
				13:10～15:10	佐藤多佳子
				15:20～16:50	フィードバック
全参加者数		115 (29)			

○各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

研修項目は、長野県教育委員会が、前年度において県下の教職員の研修要望や喫緊の課題を洗い出したものである。教育現場で今後必要とされている「プログラミング教育」を今年度新たに導入し、昨年度の人気講座であった「ICT導入の入門講座」も継続して行い、受講生のニーズに応えるようにした。

また、いくつかの講座で、教職大学院生や学部生が参加し、講座運営の補助をしたり、現職教員の受講生と一緒に学ぶ機会を作ったりした。その結果、スムーズな講座運営につながり、受講者と教職大学院生による対話や協働も行われる講座となった。

すべての講座に共通して、研修内容について協働的な演習や、模擬授業への参加という形で、講義の内容を実践的に確認できる構成をとり、受講者の講座内容の振り返りに関しても質疑応答やアンケート記載の時間を十分に確保し、「学びの質を高める」研修講座となるように配置した。

○各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
1 プログラミングに関する講座	2	令和2年度から小学校で導入されるプログラミング教育の目的を理解し、そのためにどのような教材開発、指導方法を取り入れるべきなのか、受講者相互に考え、授業を作っていくアイデアを得ることをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：学校で簡単に導入できるプログラミング教育の事例を体験し、実際に学校に持ち帰って実施するにはどのような工夫が必要かを話し合った。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
	2	教室でのICT活用時のメリットや改善点などを体験することをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：実際にドローン飛行のプログラムを試行錯誤しながら受講者で考える。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし

2	2	授業を実践するにあたっての、不安や疑問に答えながら、効果的な授業実践を可能とする授業力の向上を目指す。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：道徳科は今までの道徳の時間と何が同じで何が違うのか。道徳科の目標を基にしながら、その違いや、道徳科で目指すべきものについて理解を深め合った。 ・実施形態：講義 ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
		効果的な発問、補助発問、道徳的諸価値の理解や生き方に関して児童・生徒に理解してもらう方策を身に付けることを目指す。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：模擬授業を体験することにより、実際に学校に持ち帰って実施するにはどのような工夫が必要か、現時点での疑問点等を共有し、解決に向けて話し合った。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
3	2	I C T機器の導入が進む学校現場であって、I C T機器導入方法がわからない教員が、同じ歩調で研修を受けられることをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：I C T機器の教室環境整備や、少しの活用で授業効率化できることと、子どもの学習の活性化の方法を提案し、受講者はそれらを実際に体験した。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
		I C T活用の際に、具体的に何をどのように教室環境で使用したら良いのかを知り、実際に授業で活用する意欲を持つことをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：iPadを受講者が実際に使用し、簡単にできる活用方法を体験し、工夫点、応用点などを互いに共有した。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
4	2	学級経営がうまく行われているかどうかを評価する方法を身に付けることをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：実際に行われている評価方法を知り、実際に学校に持ち帰って評価するにはどのような工夫が必要か、現時点での疑問点等を共有した。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
		子どもが集団として過ごすためには、教科経営と学級経営が必要であるということを理解することをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：学校現場の子どもの実態や学級経営等の事例を知り、実際に各自の学校に当てはめて学級経営をするにはどのような工夫が必要か、現時点での疑問点等を共有した。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし

5 主体的・対話的で深い学びの授業づくり	2	主体的・対話的で深い学びが起る授業をデザインするためには、的確な「問い」が重要であるということを理解することをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：算数・数学の「問い」の作り方による子どもたちの学びの姿の違い、気づきの違いなどを示し、問題を解いたり、問いを作ったりしながら理解を深め合った。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし
	2	主体的・対話的で深い学びが起るためには、教材の着目するポイント、問いの立て方などが重要であることを理解することをねらいとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容：国語教材の着目点の違いによる学習者の学びの違いを示し、実際に課題を解くことにより、学習者の思考を迫体験し、課題づくりのポイントについて理解を深め合った。 ・実施形態：講義・ワークショップ ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：なし

※別紙実施要項、テキストを添付

○研修の評価方法、評価結果

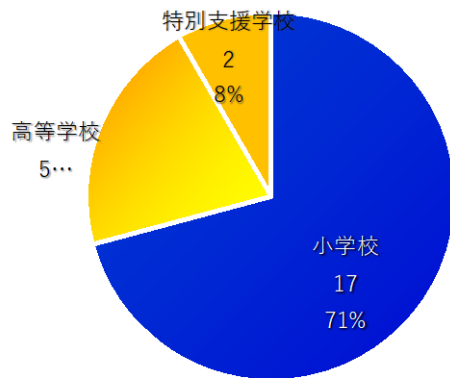
1日の講座終了後に実施したアンケートを次頁から示す。

第1回 6月21日(金)

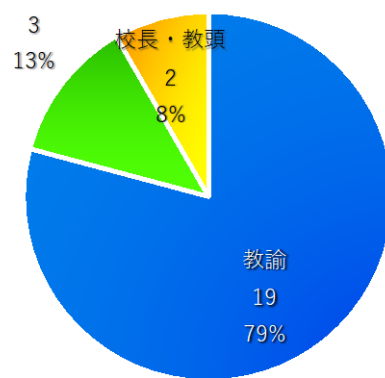
講座番号・講座名		実施日	ねらい、連絡等
3-8-01-01 プログラミング教育初めの一歩講座 ～アンプラグドとドローンによるプログラミング教育の基礎と実践～		6月21日(金)	【午前】講義・演習 「プログラミング的思考入門編」 一連の活動を実現するために、最適な言語や記号の組合せを考える活動を、ICT機器を使わないで行う授業プランを提案します。それらを実際に行ってみて、その授業プランを改善していきましょう。 【午後】講義・演習 「プログラミングの授業実践編」 プログラミングが初めての方を対象にiPadを用いて演習を行います。スクラッチで画面上の2点間を移動するプログラム、ドローンで空間を移動するプログラム等を通して、子どもと同じ学びの過程を体験しながら、このプログラミング教育という学習方法を理解していきましょう。
地域社会と連携・協働	目標実現に向け、「教育のプロ」としての高度な知識や技能 柔軟に対応する力	学習指導 生徒指導 新たな教育課題	
基礎形成	伸長 充実 次世代育成 希望 幼 小 中 高 特 専	義初 高初 義中Ⅱ 高中Ⅱ	
	○ 20名		

午前講師：准教授 大島崇行 准教授 片桐史裕 午後講師：教授 桐生 徹

学校種



受講者の職能



受講者の感想

講義「プログラミング的思考入門編」 大島崇行 准教授 ・ 片桐史裕 准教授

- ・実際に子どもたちと一緒に取り組めるようなアンプラグド教材を実践できた。
- ・ご飯の炊き方は、理科以外の教科でもプログラミング的思考を学べそうな可能性を見出せそうです。
- ・プログラミング的思考として、普段の生活の中でも考えられるものであること、試行錯誤でうまくいかないことを楽しもうというとても大切なことを学びました。
- ・折り紙・フローチャート、「あれ？」となる瞬間、たまたま頭が動いている感じがしました。
- ・折り紙を折ること、フローチャートを作ること、普段意識していない行動でも一つ一つ細かくかつ分かりやすい指示、判断のもとに動いているのだと、改めて感じることができました。これを自分が指示する側になる難しさ、伝わった時の喜びも実感できました。
- ・実際に体験することで難しさを感じるとともに、やる必要性も実感することができました。自分自身プログラミング的思考が身につけているとはいいい難いという事も実感しましたが、これから様々な活動を進めていくときに、意識しながら構築していくように心がけたいと思いました。他の先生方にも体験していただきたいと思いました。
- ・全てが新鮮でとても勉強になりました。プログラミングは相手の事を考える力、そして筋道を立てて物事を進めていく力をしっかり養えると思いました。楽しく学べてよかったです。折り紙はすぐに実践できると思いました。
- ・アンプラグドプログラミングでも試行錯誤しながら楽しく学べることが理解できました。折紙の言語プログラミングは子どもたちにも導入として役立てられそうです。また、信号機を渡るフローチャートも初歩の体験としてとても良い学習になりそうです。他にもプログラミング的思考が楽しく学べる教材開発の参考になりました。
- ・アンプラグドの考え方、実際、そして機器の必要性を実感でき、とても有意義な研修でした。学校に戻って早速職員研修を行いたいと思いました。
- ・プログラミング教育は試行錯誤することが極めて重要。失敗してもいい、むしろ失敗（エラー）を見つけてくれることが推奨されるというところに可能性を感じます。正解は一つじゃない！！。
- ・アナログでしたが最初の一步としてはハードルも低くて、やりやすかったです。すぐに周囲と合わせてみて、これが良かった、これが悪かったとキーワードを持った試行錯誤ができたと思います。折り紙も自分のイメージで28文字で表現する中で、伝わりやすさや表現方法を見直すことができました。
- ・「なるほど」と演習を通して実感することができました。考え方がよく理解できました。

受講者の感想

講義「プログラミングの授業実践編」 桐生 徹 教授

- ・ iPad、ドローンをさわって、プログラムを組んで動かすという事が初めてだったので、難しく考えず、失敗してもいいからやってみようという気持ちになりました。
- ・ 実際のドローンを飛ばすことにより、プログラムが良いか悪いか、目に見えて、2次元、3次元で確かめられる素晴らしさがあり、うまくいかなくても楽しみを実感できること。
- ・ 3Dでプログラムを動かすドローンはとても面白かったです。また、実際とプログラムのずれがありそれを「20° → 10° にしてみよう」と手作業的・試行錯誤的に微調整するところが人間的でよかったです。
- ・ やらせていただく前は、とても難しいと思っておりましたが、いざやらせていただいたら、とてもおもしろく、失敗してももう一度、もう一度とやりたくなるもので夢中になってしまいました。帰ったら早速子どもたちと一緒に「アワーオブコード」をやりたいとおもいます。
- ・ ドローンを使って実際のプログラミングで動かす体験はとても面白く、子どもだったら大喜びだと思います。
- ・ チーム内やグループで試行錯誤しながら、進めていくことにより、より学習が深まりました。
- ・ ドローンは初めて触りました。目の前で立体的に動くので、とても楽しいし自然と会話しながら考えていくことができ、子どもたちにとっても、とても有効だと思います。
- ・ 楽しいですね。ドローンを自分の考えたプログラムで飛ばすのは子どもになった気分でした。ただコストがかかりますね。高価なものになります。それがネックです。
- ・ ジャンプの課題だと思いました。！素晴らしい！。コミュニケーションを取りながら必死に自分の役割を果たしつつ、どうしたらうまくいくか考えました。見方も自分とは違っていて思考も多目的になり、失敗を恐るしがるより追究したくてたまりませんでした。
- ・ ドローン面白い！！間違ってもいい！！恥ずかしくない！！試行錯誤こそオモシロイが実感できました。！！間違えることこそ大切！！教えすぎないことが大切
- ・ iPadやドローンのエラーが多く、なかなかスムーズに実習できなかったが、院生が頑張ってくれたおかげで何とか課題ができました。こういった実習は生徒もワクワクして取り組めると思いました。
- ・ ドローンで図形を描くのに角度を計算するのが少し大変でした。「繰り返し」の方法も勝手に使ってみましたが大変便利でした。プログラミングの楽しさが味わえたと思いました。
- ・ とても楽しく学ばせていただきました。教師の技量がかなり必要だと感じました。プログラムが良くないのかドローンの問題なのか院生さんが最後まで動くように努力してくださってありがたかったです。
- ・ とても面白い講座でした。ドローンを動かすのも楽しかったですが、いろいろあるトラブルに適切に



講座のねらいの達成度

午前のプログラミングの思考入門編では、歩行者用信号の横断をフローチャートにすることや、折り紙の折り方をプログラムとして言語化するなどの演習を交えた講義を進めていただいた。午後のプログラミングの授業実践編では、ブロックプログラミングによってドローンを操作することで、コンピュータ上でのプログラミングの演習が行われた。いずれの講義演習も学習指導要領に基づいての場面設定や実際の取り扱い方がわかりやすく解説されており、受講者が子どもの立場になり、試行錯誤をするプロセスを体験する構成となっていた。

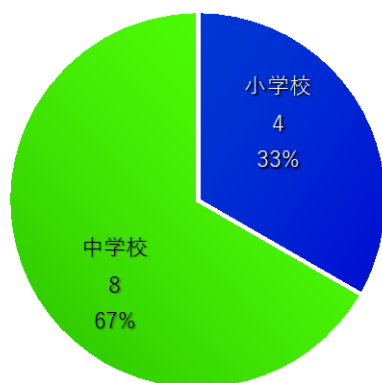
現場でプログラミング教育を推進していく上でのヒントや現場ですぐに活用できる具体が提供されていたこともあり、ねらいは達成できていると考えている。

第2回 7月25日(木)

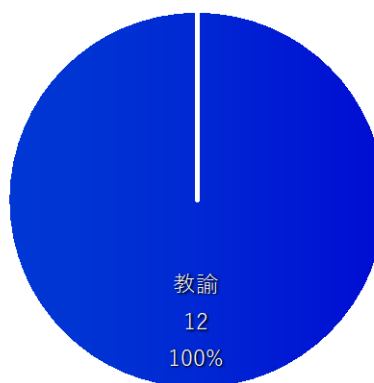
講座番号・講座名		実施日	ねらい、連絡等
3-8-01-02 道徳授業づくり講座 ～道徳授業づくりの理論と実践～		7月25日(木)	講義「道徳授業づくりの理論と実践」 ①道徳授業づくりで大切なこと ②道徳科の評価の在り方 ③道徳授業づくりの実際—道徳的行為に関する体験的な学習を中心に— 等をテーマに、2人の講師で受講者の先生方の不安や疑問に応えながら、具体的な授業実践を可能とする授業力の向上を目指します。特に午後は、小学校と中学校の模擬授業を行います。主題や具体的なねらい、効果的な発問や補助発問、道徳的諸価値の理解や生き方に関する理解を深める具体について、実践的に理解をしていきましょう。
地域社会と連携・協働	目標実現に向け、「教育のプロ」としての高度な知識や技能 柔軟に対応する力	学習指導 生徒指導 新たな教育課題	
基礎形成	伸長 充実 次世代育成 希望	幼 小 中 高 特 専 義 初 義 中 義 高 Ⅱ	
	○	20名	

講師：(終日) 教授 早川裕隆 (上廣道徳アカデミー所長) (終日) 特任教授 小宮 健 (上廣道徳アカデミー)

学校種



受講者の職能



受講者の感想

講義「教科化で変わったこと・変わらないこと」 小宮 健 特任教授

- ・大切にしていける基本の部分が分かりました。
- ・通知表の扱いや授業の終末まで子どもがどんな事を考えていけばよいかなどはっきりしてきました。
- ・登場人物の心情理解が悪いわけではないという事を教えていただきました。そこから自分だったら、と考えを深め友と議論する中で実践に向けたエネルギーを蓄える授業にしたいです。
- ・道徳科は「栄養を蓄えるような時間」という表現になるほどなとじっくりきた感じがしました。だからこそ子どもたちの目の前の言動を意識して授業づくりをしなくてはいけないという基本的なところを再確認しました。
- ・学習指導要領を詳しく読んでいなかったこともあり、今回教科化になったことでどんなことを意識すればよいか理解することができました。
- ・道徳の目標について細かく知ることができた。教科化で変わったことは教科書があること、要録に記載するという事と分かった。

受講者の感想

講義「道徳授業づくりで大切なこと(評価を含む)」 早川裕隆 教授

- ・ねらい-評価 具体的に「[はしのうえのおおかみ]」で取り上げていただけたのでわかりやすかった。
- ・評価の書き方、子どもたちの意識の変化をつかむようにすることが大切。
- ・明確なねらいを設定するポイントを教えていただきました。項目や全員が達成できなければいけないのではないかと思いついていました。他教科と同じように評価をするうえでも大切になってくるので意識していきたいです。
- ・全体共有の場が合意形成の場になってしまうこともあり、そうならないためには、事前に子どもたちと共有すべきことがあるのかなと考えながら聞くことができました。
- ・授業づくりにおけるポイントが分かりました。授業の主題を明確にしてねらいを設定していくことが大切であると感じました。
- ・合意解ではなく、納得解を生み出すしかけを。主題となるねらいをはっきりとさせて作っていきたいと思いました。
- ・道徳的諸価値の価値理解/人間理解/他者理解の区別ができ、また3つの視点が重要だと感じることができました。

受講者の感想

講義「道徳授業づくりの実際－小学校を中心に－」 小宮 健 特任教授

- ・教材の奥深さを知りました。
- ・言語化が難しい1年生の考えをどのように言語化していくか学べた。
- ・ロールプレイの取り入れ方、子どもへの問いかけ、発問（中心発問、補助発問）の仕方など、参考になりました。
- ・実際にロールプレイをさせていただき、教材のとらえ方が変わるのを感じました。また、生徒の意見の引き出し方、まとめ方について、勉強になりました。いつも脱線してしまうのでねらいに沿って進めたいです。
- ・役割演技の効果を実感しました。題材はシンプルで「友達ってこういうもんだよ！」ってすぐに言いがちなんだけど演技をすることで心情を言語化できたので、友達について実感的にこうだなと思うし、同時に「これでいいのか？」との問いが生まれました。
- ・ロールプレイや役割演技の大切さがわかりました。気持ちや思いを伝えていく上でこのような体験的な学習はとても大切だと思いました。
- ・ロールプレイでの道徳的価値の深まりがとても見られてよかった。学校での授業で実践してみたい。
- ・ロールプレイの意義が分かった気がしました。小1の子たちにどのように自分としてとらえさせるかは、考えなければならないと感じた。

受講者の感想

講義「道徳授業づくりの実際－中学校を中心に－」 早川裕隆 教授

- ・誰に演じてもらうのかも大切。ロールプレイの手順もわかりやすくすぐに授業で使えそうです。
- ・児童一人ひとりの顔を見て、思いを受け取りながら授業を作っていくことの大切さを実感しました。
- ・問い返して引っ張り出す。語り口調。（深化、統合、補充）
- ・「一冊のノート」認知症の祖母と反抗期の中学生の心情がよく分かりました。早川先生でないと深められない指導案かなと思いました。
- ・読み物資料を効果的に扱う授業の流れを教えてくださいました。早川先生のように進められたらいいのですが。これから努力を続けます。
- ・演者の選定が非常に難しいと思いました。授業者が深い価値理解、人間理解、他者理解をしていないと適切な役割演技にならず、深まらなくなるのではと思いました。
- ・模擬授業を通して、発問の大切さ、問い直し大切さを改めて学びました。また、授業の中に役割演技をどのように取り入れればよいのか実際の授業から学ぶ事が出来とても勉強になりました。
- ・役割演技の効果がよく分かりました！効果的に使えれば感情や思いの人間理解、他者理解が促される。
- ・誰の視点に寄り添っているのかを考えることが大切→ロールプレイングにつなげる。行動について触れているところは、その時の感情をしっかりと発問して聞いていくと本質に近づいていく。
- ・ロールプレイの意図や人選など、授業者が前もって把握しなければならないと思った。何より教材研究、資料の読み込みが必要。



講座のねらいの達成度

1つ目の講義では、道徳教育と道徳科の関係を「扇とその要」と例示し、様々な活動として行われている道徳教育の要として道徳科があるとした。そのうえで、道徳教育と道徳科の目標の違いや、道徳科で提唱されている「考え、議論する道徳」の授業や指導法等について講義し、授業のねらいを明確にすることの大切さをお話しいたいた。

2つ目の講義では、道徳的諸価値「価値理解」「人間理解」「他者理解」に関して、考え、議論することが子どもたち一人ひとりの道徳的価値の意味や意義の再構成・再構築となり、理解の深まりにつながることをお話しいたいた。そして主題を明確にし、ねらいを具体的にすることが中心発問や構成の具体化、指導計画づくり、ひいては評価の観点につながることをお話しいたいた。

午後は講義を踏まえ、2つの模擬授業が行われた。小、中学校の教材ごとに講師が教師として、受講者が子どもの立場で模擬授業をおこない、具体的に講義の内容の理解を図った。

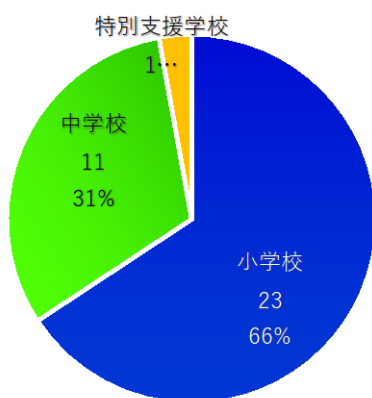
受講者も理論だけでなく、実際の発問、子どもの言葉の扱い、深化のさせ方の実例を体験でき、当初の講座の目的は達成できているものと考えている。

第3回 8月5日(月)

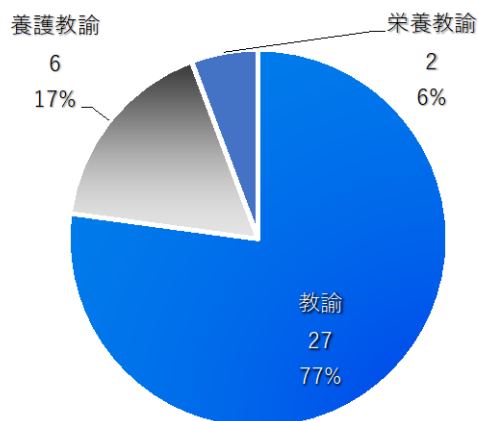
講座番号・講座名		実施日	ねらい、連絡等
ICT活用	3-8-01-03 ICTの初歩の初歩講座 ～授業でのICT活用の基礎と実践～	8月5日(月)	【午前】講義 「明日から使える簡単ICT活用術」 ICTの研修と聞くと気分が乗らないICTが苦手な人のための講座です。基本的なICTの役割を知り、授業場面での簡単な使い方をICT機器に触れながら体験的に実践します。苦手意識を興味に変えるための講座内容です。 【午後】講義 「初めての先生向きiPadの活用」 iPadを授業で使ってみませんか？新しい知識はありません。初めての方ができるようになるための講座です。iPad等をご用意いただく必要はありません。使ってみようと思う気持ちだけをもってご参加ください。
	地域社会と目標実現に向け、「教育のプロ」としての高度な知識や技能 連携・協働 柔軟に対応する力		
	学習指導 生徒指導 新たな教育課題		
	基礎形成 伸長 充実 次世代育成 希望 幼 小 中 高 特 専 義初 高初 義中Ⅱ 高中Ⅱ		
		20名	

午前講師：准教授 榎原範久 午後講師：教授 水落芳明

学校種



受講者の職能



受講者の感想

講義「明日から使える簡単ICT活用術」 榎原 範久 准教授

- ・子どもたちのICT態度、教員のICT活用指導力の状況の値を見てこれはいけないと思いました。授業でICTを活用しておこうと心に強く感じました。実物投影機も活用していきたいです。
- ・機器名など初歩から学ぶ事が出来、大変分かりやすい講義でありがたかったです。実物投影機の使い方がわかり、活用してみたいという気持ちになりました。
- ・学校現場でICTを導入していかなければならない実情を知れ、夏休み明けには学校にある機器を使って授業をしようと思いました。まだまだ現場にはICTの機器が少ないので使えるものがもっと増えればよいなあと思いました。とりあえず、あるものをフル活用したいです。
- ・Information Communication Technology恥ずかしながら書けませんでした。ICTとは何かも知らず、使ってくれ、やってみようなんて言えなかったです。でも今は皆似たようによくわからない状態なので私もどんどん聞いて実践して、実践して実際に使ってみて、その良さを子どもたちと体験できたらいいなと思います。
- ・Edutabによる授業実践の可能性は計り知れないと思った。「苦手だから」「使い方が分からないから」という理由で活用しないのは子どもたちの可能性をつぶすことにつながると思った。
- ・“ICT”と聞くと、敬遠してしまう気持ちがありますが、Society5.0の話や、子どもたちにICT教育を指導する必要性（責任）を改めて感じました。書画カメラは各クラス一台ある環境なので、今後も活用したいと思いました。
- ・ICTに情報通信技術のことでSociety5.0を生きていく上で欠かせないものだ学びました。私は学校の教室（授業）でタブレットを生徒が使う事に疑問を持っていましたが、その考えがすこし変わりました。
- ・本当に初歩の所から教えていただき、ありがとうございました。なんとなく自分に便利な機能は使っていましたが、機器の名称もわからずに使ってました。またICTがこれからの子どもたちにとって、どれだけ大切かもわかりました。PCアレルギーでなかなか、「活用」というところまでやっていませんでしたが、子どもたちのためにも少し活用してみようと思いました。
- ・“初歩の初歩講座”という事で、丁寧に説明いただけて良かったです。子どもたち使えればいいかなと思いながら自信がなく思い切って使わせてあげられずきたので、もう少し勉強して活用できればと思います。

受講者の感想

講義「初めての先生向きiPad活用法」 水落 芳明 教授

- ・私生活では使っているiPadが、授業での活用にこんなに多くの可能性を持っていることを知り、ぜひ使ってみたいと思いました。児童一人に一台のiPadがあるとよいと思いました。頭をやわらかくして“人間技を磨く”“アイデアを出す”事を心掛けていきたいです。
- ・本当に初めての活用だったが、iPadでの課題に取り組む子どもたちの気持ちになることができた。進んで活動したり、友達とも関わりやすく、主体的・対話的で深い学びにつながると感じた。水落先生のお話はユーモアもあり、苦手意識の強い自分にとっては、とても参加しやすくありがたかった。
- ・いろいろな使い方を教えていただいて、すぐに使ってみたくまりました。
- ・iPadがこんなにも楽しい使い方ができることに驚きました。ICTを使うのをためらわずに人間技への面白利アイテムとして使ってみたいなあと思いました。健康教育でどんな風に使おうかな。
- ・ネットに接続していなくてもiPadの中に機能で授業を組み立てることができるということが分かりました。アイデア一つでだいぶ活用に幅が広がりました。2学期に試してみたいです。
- ・「アイデアが勝負!!」という言葉がとても印象的だった。子どもたちどうしをつないだり、自分で判断できたりする授業・学習をしてみたいです。写真、カメラだけでできることがたくさんあると分かったので、2学期からいろいろな場面で挑戦してみたい。
- ・iPadを使ったときのワクワク感や友達との協働して取り組みたくなる感じを、身をもって学べた。現場でも数少ないiPadを何とか活用していきたい。人間ならではの力を伸ばしていくこと、大切にしていきたいことが我々の使命だと感じた。
- ・写真しりとり、フォト575、子どもならどんな写真を集めてくるのかな?と楽しみになりました。こちらが正しい知識を持ってきちんと教えてあげられれば、怖いものではないということが分かりました。
- ・最近学校にiPadが20台入りましたが「自分には関係ない機器」とどこかで思っていました。今回の講義を通して簡単にしかも興味深く使えることが分かりました。明日、早速使ってみようと思います。そして夏休み明けには子どもたちの前で実践したいです。
- ・iPadは使うのが目的ではなくiPadを使って仲間とつながるものというのを実感して納得しました。短時間で楽しく他の受講者さんたちと考えたり学び合う事ができました。



講座のねらいの達成度

午前の講義では、ICTという言葉そのものや、Society5.0などの説明を交えながら学校でのICT活用の必要性についてお話しいただいた。また、機器の名称を覚えるところから始めて、教材提示装置やedutabを使い、受講者が実際に操作することでICTに対する理解を進めていただいた。

午後の講義では、学習指導要領の改訂のポイントと関連して、子どもたちの10年後の就職活動のライバルとしてAIがあり、ICT機器を使う際に人間でなければできない使い方をするべきとお話しいただいた。また初歩の初歩講座という事もあり、iPadの操作の基本を2名一組で実施し、カメラ機能のみを用いての写真しりとりやフォト575という演習を含めながら、人間技を磨くことの重要性和、ICT活用はアイデア勝負であるとお話しいただいた。

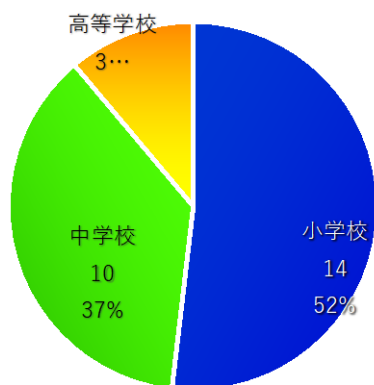
受講者のうち、これまでにiPadに触れたことのある方は5～6名であった。講座を実施したことで、簡単な写真の編集なども行えるようになった。edutabという協働学習ツールも、平易に使えることが理解された。受講者が協働学習に参加し、iPadで写真を撮って発表することができていることから、講座のねらいは達成できていると考えている。

第4回 8月26日(月)

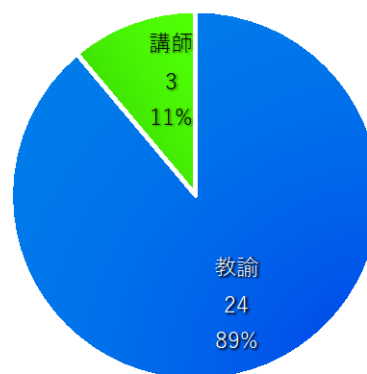
講座番号・講座名		実施日	ねらい、連絡等																											
学級づくり	3-8-01-04 学級経営の評価と実践 ～効果的な集団づくり～	8月26日(月)	学級経営は、教育活動の基盤です。学力向上、働き方改革を実現する最も効果的な取組の1つでもあります。 【午前】テーマは「学級経営の評価」です。グループワークで学級経営における評価規準の作成を行い、学級経営の今日的な課題と傾向を把握します。その評価規準表を活用して今後予想される課題の予防と解決方法を考え、年度後半の学級経営計画を作成します。 【午後】テーマは「指導力高い教師の知識・技術」です。効果的な指導をしている教師たちは、どのような考えの元にどのようなことをしているのでしょうか。研究や実践をもとに考えます。																											
	<table border="1"> <tr> <td>地域社会と連携・協働</td> <td>目標実現に向け、「教育のプロ」としての高度な知識や技能</td> <td>学習指導</td> <td>生徒指導</td> <td>新たな教育課題</td> </tr> <tr> <td></td> <td>柔軟に対応する力</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>			地域社会と連携・協働	目標実現に向け、「教育のプロ」としての高度な知識や技能	学習指導	生徒指導	新たな教育課題		柔軟に対応する力																				
	地域社会と連携・協働			目標実現に向け、「教育のプロ」としての高度な知識や技能	学習指導	生徒指導	新たな教育課題																							
	柔軟に対応する力																													
<table border="1"> <tr> <td>基礎形成</td> <td>伸長</td> <td>充実</td> <td>次世代育成</td> <td>希望</td> <td>幼</td> <td>小</td> <td>中</td> <td>高</td> <td>特</td> <td>専</td> <td>義初</td> <td>高初</td> <td>義中Ⅱ</td> <td>高中Ⅱ</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	基礎形成	伸長	充実	次世代育成	希望	幼	小	中	高	特	専	義初	高初	義中Ⅱ	高中Ⅱ															
基礎形成	伸長	充実	次世代育成	希望	幼	小	中	高	特	専	義初	高初	義中Ⅱ	高中Ⅱ																

午前講師：准教授 岡田広示 午後講師：教授 赤坂真二

学校種



受講者の職能



受講者の感想

講義「学級経営の評価」 岡田 広示 准教授

- ・学級経営の3領域やルーブリックを生かすと、より子どもを看取ることができると思いました。子どもの何を看取るのか、どのような教育がよい教育なのかを迷っている私にとって1つの指導の軸として有効活用できるなあと感じました。
- ・学級経営のルーブリックを作成する中で、他の先生方が大切にされていることを知ることができて良かったです。また、作成することで自分の目指す学級がより具体化されたように思う。今回作成したことを生かし、今後の指導の手立てにしていきたい。また改めてゆっくり考えてみたい。
- ・今まで、あいまいになっていた評価について、具体的に学ぶことができた。又、グループワークを通して、他の先生方の学級経営に関する評価基準について知れ、自分の考えが深まった。
- ・評価というものが何なのか、そのためにはどうしたらいいのか具体的に教えていただき本当に勉強になりました。学習面のみならず生活面でも目標を持って子どもと接すると声かけが変わるという言葉がさきりました。子どもに対する評価の大切さも痛感したので今後生かしていきたいと思います。ありがとうございました。
- ・「学級経営に羅針盤を持っているか」というお話が心に残りました。自分自身も学級経営の目あて等を持って取りこんでいきましたが、もう一度優先順位を整えた上で自分の経営を見直し、どうあるべきかを捉え直していきたい。
- ・今まで評価は大切だと思っていましたが、深く考えたことはありませんでした。ルーブリックの作成ワークはその方法をよく知ることができ、参考になりました。真価を認めて励ますこと、子どもの味方となれる評価をしていきたいと思えるご講演でした。
- ・根底にあるのは居心地の良い学級であり、秩序(ルール)と自守性にまかせる部分とが、何となくで理解していたが、話を聞き明確化した。続けてルールに取り組みさせること、2つともが大きくなって効果を上げることなどの発見ができた。
- ・ポートフォリオ作成が印象に残りました。初めて作ったのですが、優先順位から考えていくということ学びました。可能であれば、自分が作ったものを他の先生にも見ていただきたいと思います。
- ・目標と評価について改めて考え、学ぶことができた。自分が示した学級の基準はふんわりとしていることもわかったし、より具体的なイメージをもっていけないと経営をするようになったときに自分も学習者側も迷子になってしまうと思った。より具体的なイメージをもてるようにより一層学んでいきたい。

受講者の感想

講義「指導力の高い教師の知識・技術」 赤坂 真二 教授

- ・問題行動をなくすという観点でみるのではなく、人格を形成するという観点で指導方法を改善していきたいと思いました。指導方法を目標や問題行動に当てはめて常にトライしていきたいと思います。
- ・学級が安定しているからこそ、主体的・対話的で深い学びの実現ができるというお話を聞き、本当にそうだなあと感じました。子ども達との関係とクラスのルールをもう一度見直していきたいです。他クラスでだいぶ困っている先生がいるので、紹介していきたいです。
- ・主体的・対話的で深い学びをするためには学級がしっかりできていないというのがとてもしっくりきました。2学期に活かしていこうと思います。とても楽しい講義でした。
- ・”身内をつくる”という言葉、自分の学級で活躍する子を見ても、つながりが広いなと感じ、とても腑に落ちました。
- ・「人格形成」まで見すえた指導について、参考になりました。今まで無意識にしていたのかもしれませんがそこまで意識して接していきたいと思います。又、学級の雰囲気、あたたかい雰囲気を作っていく前向きな期待をもっていこうと思います。
- ・熱い先生の言葉の中から今、自分が行わなくてはいけないことを振り返ることができました。今日の講義の中で、一番心に残ったのは子どもの人格形成までを考えた見すえた言葉がけをしていくことが、とても大切だと思いました。
- ・学級経営におけるルールの大切さを再確認しました。昨年クラスがゴタゴタした時、いかに自分のルールがあいまいで、中間層の子を見落としていたのか、それがよく分かりました。
- ・ユーモアあふれる語り、すてきでした。笑顔は大切です。
- ・1対1を逃さない。
- ・赤坂先生の人柄にふれられて、うれしかったです。
- ・楽しみながら学ばせていただきました。織物モデルを基盤にして学級経営をしていくこと、信頼があるからこそ指示が通ったり浸透していくということ、子どもと関わり、関わらせながら関係性をつくっていくことの大切さを学びました。貴重なお話をありがとうございました。
- ・規範意識の高いクラスは、相互作用が働き、プラスのスパイラルが回り続けるクラスであると感じた。
- ・ルールとリレーションの確立が大切なことは分かっていたが、様々な先行研究からより具体的な部分まで理解することができた。また、主体的対話的で深い学びについてイメージをもつことができた。
- ・学級経営において大切にすべきことが分かった。子どもたち同士のつながりがないとクラスが崩れるということが今日の講義を通してよく理解できた。普段は授業実践について学ぶことが多いので、学級経営の分野についても学んでいきたい。



講座のねらいの達成度

午前の講義では、教育活動に必要なものは目標と評価を一体化させること、教育評価とは子どもの学びと育ちを看取ることであることをお話しいただいた。後半の演習にてルーブリックの作成、理想の学級の具体的姿をまとめ、最後に受粉学習という形式で全体共有の場を設定していただいた。

午後の講義では、学級経営は、文化や伝統の尊重・秩序の確立という縦の繋がり(縦糸)と教師と子ども・子ども同士の心の通い合いという横の繋がり(横糸)が絡み合っただけで成立するという織物モデルが大切であること、主体的・対話的で深い学びができるためには学級経営なくしては無理であるとお話しいただいた。後半は、生徒の人格形成に向けて、問題行動・気になる行動をピックアップし、方法を探るグループワークを設定していただいた。

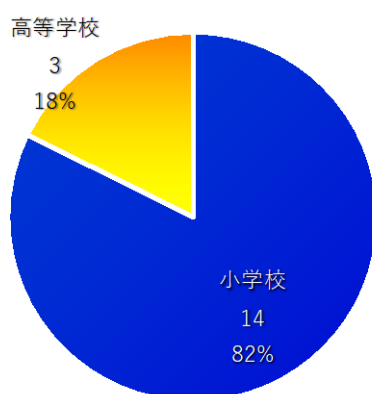
子どもの学びと育ちを見取り、生徒が主体となって学習に励むために学級経営の体制をととのえることが重要であることを受講者は十分理解でき、講座のねらいは達成できたと考えている。

第5回 9月17日(火)

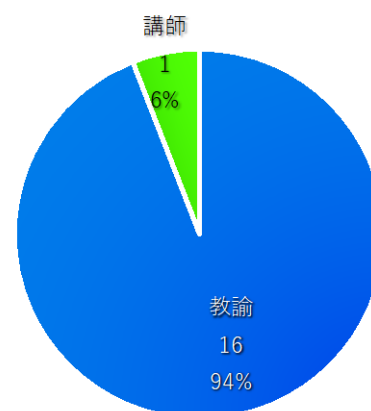
講座番号・講座名		実施日	ねらい、連絡等
3-8-01-05 主体的・対話的で深い学びの授業づくり ～算数・数学と国語での「深い学び」～		9月17日(火)	【午前】講義 「深い学びを実現する算数・数学の教材アレンジ」 算数・数学の授業で、子供たちに「問い」が生まれているでしょうか？深い学びを実現するためには、教科書教材をアレンジし、「問い」が発生するような仕掛けが必要です。教科書教材のどの部分をどのようにアレンジしたらよいかを、具体的に考えてみましょう。 【午後】講義 「深い学びを実現する国語授業デザイン」 国語科における「深い学びの過程」とはどのようなものでしょうか。実際に作品を読みながら「深い学びの過程」を体験し、「問い」や学習デザインを参加のみんなで考えるワークショップ中心の講座です。
授業改善	地域社会と連携・協働	目標実現に向け、柔軟に対応する力	学習指導 生徒指導 新たな教育課題
基礎形成	仲長 充実 次世代育成	希望 幼 小 中 高 特 専	義初 高初 義キII 高キII
		○	20名

午前講師：教授 松沢要一 午後講師：教授 佐藤多佳子

学校種



受講者の職能



受講者の感想

講義「深い学びを実現する算数・数学の教材アレンジ」 松沢 要一 教授

- ・子ども達の中から問いが生まれ追究できるように、教材と向き合っていけたらと思いました。
- ・算数の授業で、いつもこちらが問題を提示し、どうやって解いて考えていくか道すじをつくりすぎているところがあり、考えさせるというよりは教える方が多くなってしまっている。今回のお話で、ちょっと教師が目線をかえていくことで、子どもたちの疑問、問いが生まれてくるのだな、ということが分かり、明日からの授業を考えていきたいと思った。
- ・子どもの気付きをもっととりあげて、そこから授業づくりをしていく教師になれるよう、今日教えていただいたことを実践したいと思いました。
- ・主体的・対話的な学びについては、いろいろなところで話題にあがることが多く、理解をしてこれたが、松沢先生の話聞いて、深い学びについての授業者の視点を教えていただけた。
- ・教師の教材研究がいかにかできるかが大切だと思った。子どもたちはどんな問いをその課題からもつことができるのか、新しい問いを生むことができるのか、というところを考えなくてはならない。与えられる課題でなく、しりたくなる課題になるよう、一工夫したいと感じた。
- ・教科書のとおり教えるのではなく、教科書教材をアレンジしたり、子どもたちから疑問がうまれるような問いの工夫。1授業に必ず「主体的～」が入らなくてもよく、単元の中で考えていけば良いとお聞きし安心した。
- ・小学校でいかに深い学びが展開されているかを知ることができた。高校では内容が深化・難化し、モチベーションの維持が難しいが、数学の世界そのものを楽しめるような教材を考えていきたい。
- ・昨年度もこの講座を受講させて頂きました。数学(算数)教材での学びの仕掛けづくりを、自分の担当する教科(国語)に置換して、色々考えることが、昨年度はうまく出来なかったのですが、今回は、非常に理解し(応用を考える)ことがうまく出来たように感じております。深い学びの為に「深い教材研究」が必要であることも痛感させられました。
- ・算数や数学は教科書の教材を少し工夫するだけで、アクティブ・ラーニングに成り得ることを知った。生徒・児童の学習状況をしっかりと見とり、一人一人の考えを大切にし疑問を持たせるといった働きかけが深い学びに繋がることを知った。
- ・他教科との違いについて考えることによって自分の教科ですべきことが明確になり、とても参考になるところもあった。
- ・教科書を教えるではなく、教科書教材で学びを広げるというイメージでいるようにしたい。

受講者の感想

講義「深い学びを実現する国語授業デザイン」 佐藤多佳子 教授

- ・「子供がもっているものを引き出す」ために、教材研究を大切にしていきたいと思いました。子どもたちが、考えたい問いを単元の中で1つでもよいので考えてみたいと思います。
- ・教材のどのような部分に注目するよう仕掛けるか、教えていただきました。また、言語活動について改めて考える機会をいただきました。
- ・「読む」って楽しいな、と感じるひとときだった。でもそれは、「問い」に引き付けられる自分があったから。どう問いを作り出していくか・・・やはりここが大切、今後意識して行っていきたいと感じた。
- ・実際に金子みすゞの詩を用いたのは、主体的・対話的で深い学びを体感できた。
- ・どの部分を読ませるのか、この作品にはどのような表現手法の特徴があるかを教師自身がじっくり読み深めることが大切なんだということが分かりました。先生方とのグループ活動を通して、読解のポイントがそれぞれ違ったことに「なるほど」と思わせていただきました。
- ・国語の授業の進め方、実践を通して教えていただき、ありがたかった。グループで話したことにより、自分と違った意見も聞けよかった。
- ・詩と絵本の両方とも、グループワークを通して気付くことがたくさんあったので緊張しながらも楽しく考えることができた。オリジナルの問いを出すと、ゴールをどうすればいいのかわからなくてやりっぱなしになってしまうので、ポイントを絞って挑戦してみたい。
- ・国語の文と数学の文と同じ日本語で書かれた文でも、見方・考え方をどうはたらかせるかで違う読みになることがわかった。他教科の見方・考え方を知り、自教科に活かせることもあるそうだと感じた。
- ・国語教材を通して考えられる点はとても嬉しく思いました。先生が選定して下さった教材がどれも面白く、読み方もいろいろと他の方の意見を伺いながら深めることができました。小学校と高校が同じ講座に居ることで、先生も御苦労なさったかも知れませんが、個人的には義務（小学校）に寄せる形にして頂いて大丈夫（その方が面白い）と感じています。
- ・「問い」をグループとなって作ることが出来たのが良い経験であった。国語の魅力は、様々な答えがあることなのでそれをひきだせる「問い」を考えていきたいと思う。
- ・国語での学び方について考えることができた。この学びの深め方は他教科でも同じだと思うので、自分の教科で考えていきたい。



講座のねらいの達成度

午前の講義では、TIMSS(小4・中2対象)から、日本の学力の弱点が「学習意欲」に関係しているとの視点で授業改善を必要としているとお話いただいた。授業改善に向け6つの留意点をもとに児童・生徒自らが「問い」を見出すための教材アレンジを研究していくことの重要性、3つの学びを意識した教材例を紹介いただいた。

午後の講義では、子どもがもっているものを引き出すために、言葉による見方・考え方を働かせることが重要であることをお話いただいた。後半は、グループ演習として、金子みすゞ氏作「つもった雪」による連の構成、「つみきのいえ」を題材に、登場人物(おじいさん)の心情を探り、生徒にとっての深い学びのデザインとは何かを体験することができた。

「主体的・対話的で深い学び」で重要な「教材アレンジ」や「問い」について受講者が体験しながら講義を受けることができ、講座の目標が十分達成できたと考えている。

○研修実施上の課題

大学院生と行う対話的研修は概ね受講者には好評価であった。しかし、講座実施日によっては、大学の授業と重なり、参加できる院生がいなかったり、少なかつたため借り上げバスを出すことができなかつたりする講座があつた。大学の授業が優先であるので、致し方が無いことだが、学生の希望者が少人数でも参加できる方策を考える必要がある。

②事後のフィードバック（講座ビデオによる研修）

○研修の背景やねらい

①「対話的研修」の内容をビデオ撮影し、公開可能なほぼ全ての内容を動画配信サイト（vimeo：<https://vimeo.com/>）にアップロードすることにより、講座受講者が研修後に研修内容を復習したり、同僚等に研修内容を伝える時に閲覧したりできるようにし、研修内容の定着を図ることをねらいとする。

○対象、人数、期間、会場、日程、講師

研修項目	対象	閲覧数	講師	URL : パスワード
1 プログラミングに関する講座	講座参加者	5	大島・片桐	https://vimeo.com/345149175 : nagano0621
		4	桐生徹	https://vimeo.com/345145019 : nagano0621
2 道徳授業づくり講座		2	早川裕隆	https://vimeo.com/350890955 : 0725kensyu
		5	小宮健	https://vimeo.com/350936444 : 0725kensyu
3 ICT初歩の初歩講座		2	榊原範久	https://vimeo.com/352909100 : 0805sinsyu
		4	水落芳明	https://vimeo.com/353300509 : 0805sinsyu
4 学級経営の評価と実践		2	岡田広示	https://vimeo.com/357008615 : koza0826
		17	赤坂真二	https://vimeo.com/358470888 : koza0826
5 主体的・対話的で深い学びの授業づくり		4	松沢要一	https://vimeo.com/362504337 : jugyo0917
		3	佐藤多佳子	https://vimeo.com/362725038 : jugyo0917
総閲覧数		48		

※閲覧数は 令和2年2月18日現在

○各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

昨年度は10分程度に編集してDVDにコピーして配布していたが、編集の労力が膨大であり、時間がかかることと、送付にも時間がかかり、受講者の手元にDVDが届くのに講座終了後約1カ月以上を要していた。講座内容のほぼ全てをオンラインで閲覧できる形式にすることにより、講座終了後2週間以内で受講者が閲覧し、講座内容の記憶が鮮明なときに確認してもらい、内容を定着してもらうことをねらいとした。

○研修の評価方法、評価結果

動画を閲覧できるサイトにアンケートフォームを設置し、動画を閲覧した後に答えてもらおうという意図があつたが、動画閲覧数も少なく、アンケートに答えてもらった数はほんのわずかであつた。答えてもらった5つの回答のうち、「（自分の受けた講座の）全てを閲覧した」：1、「一部を閲覧した」：4という回答で、全てが「（動画内容は）ためになった」という返答を得られた。また、この動画の有効性はどのようなものだったか（複数回答可）について、「講座の復習になる」：5、「他の人にも紹介したい」：3という回答だった。

○研修実施上の課題

DVD教材よりもフィードバックが得られるかと予測したが、講座終了後しばらく経つと、動画を閲覧したいという気持ちが弱くなるのか、閲覧数は伸びなかった。動画を拡散しないためにパスワードを設定したため、それが煩く思われたのか、閲覧の機会を逸したとも考えられる。次回からは受講生に了承してもらい、パスワードをかけない状態での限定公開（URL のみの公開）にして、気軽に動画リンクをクリックしてもらおうような工夫が必要だと考える。

③出張拡散研修

○研修の背景やねらい

長野県総合教育センター以外で行われる民間教育研修を含む全国教育研修会や学校校内研修会などに大学教員と教職大学院生が参加し、対話的研修講座で学んだ知見を元に、研修会に参加している現職教員と対話的研修を行い、各地の現職教員にもこの研修方法を拡散し、研修会参加教職大学院生の更なる意識の向上を図ることをねらいとする。

○対象、人数、期間、会場、日程、講師

研修名 (場所)	対象	研修参加人数	期日	講師・ 助言者等	参加 大学院生等
1 日本群読教育の会栃木大会 (栃木県 小山市生涯学習センター)	小・中・高・大の教員・大学院生・大学生等	64	8月3日(土)	片桐史裕	大学院生1名
2 第15回教室『学び合い』フォーラム《海》 (福岡県福岡市 西市民センター)		約300	8月3日(土) ～4日(日)	西川純	現職教員1名
3 新潟県高等学校視察・授業研究会 (新潟県立新潟工業高等学校・新潟県立新潟中央高等学校)		10	9月3日(火) ～4日(水)	片桐史裕	大学院生5名
4 第29回全国産業教育フェア新潟大会さんフェア新潟2019 (新潟県新潟市 朱鷺メッセ)		約1000	10月26日(土) ～27(日)	片桐史裕	大学院生2名
5 平成29・30・令和元年度福岡県筑紫野市教育委員会研究指定・委嘱二日市中学校区 三校合同研究発表会 (コミュニティスクール筑紫野市立二日市中学校・天拝小学校・二日市北小学校)		約700	11月14日(木) ～15日(金)	水落芳明	大学院生4名
6 長野県伊那市立東春近小学校校内研修 (長野県伊那市立東春近小学校)		22	11月27日(水)	桐生徹	大学院生5名
7 長野県伊那市立手良小学校校内研修 (長野県伊那市立手良小学校)		約100	11月28日(木)	桐生徹	大学院生5名

8 長野県阿智村立浪合小学校校内 研修 (長野県阿智村立浪合小学校)	106	1月24日(金)	桐生徹	大学院生3名
9 第1回教科の見方・考え方を身に 付ける授業デザイン研究会 (静岡県立駿河総合高等学校)	17	2月1日(土)	片桐史裕	大学院生3名

○各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

○研修の評価方法、評価結果

各研修の実施形態、内容、成果等を以下に示す。

1 日本群読教育の会栃木大会

○開催日：令和元年8月3日（土）

○ねらい：群読の実践発表及び、授業への群読活用例の情報収集

○会場：栃木県小山市生涯学習センター

○講師、参加者名（大学側）：片桐史裕 堀晃大

○研修内容

- ・日程：令和元年8月3日（土）午前9時～午後3時
- ・参加者数：64名
- ・内容の概要

分科会は午前、午後で学習Ⅰ・Ⅱと別れており、Ⅰでは入門編の体験、脚本づくり、実践・活用の交流会、Ⅱでは、詩、言葉遊び、物語、古典、英語の実践発表、および脚本作成の分科会があり、最後の全体会で作った群読脚本をもとに発表するといった流れであった。

- ・拡散内容の概要（講師、発表者の場合）

漢文学習者の群読脚本の制作過程の研究という発表を行った。漢文『史記』を高校生の学習者が群読脚本を作成し、複数回作成、発表した変化を検証したという内容である。

- ・現場の先生との対話的学びの内容

片桐准教授の発表のアシスタントを行った。授業で群読の脚本制作の実践を行いたいという方が多く、つまづいている部分のアドバイスをを行い、一緒に練習、発表をした。

○成果と課題（全体的にどのような学びがなされたか、この研修等の感想、このような研修参加形態の今後の課題等）：

最も学びになったのは同じ実践者から実際の苦労や、学習者のリアクションなどがうかがえたことである。それによって自分の個人研究の不足分であるところも補うことができた。何より、群読の実践者たちと交流が持て、つながりが得られたという点に関してはとても良い体験ができた。

今後の課題は、本会において、若い実践者の参加を促し、今後を担う若手教員に群読の情報発信をすることである。

2 第15回教室『学び合い』フォーラム《海》

○開催日：令和元年8月2日（土）～3日（日）

○ねらい：『学び合い』の考え方や、それに基づいた教育実践について、教育関係者だけでなく、保護者、学生、医療・福祉関係、民間企業の方など、様々な立場から意見を交流し理解を深める。

○会場：福岡県 福岡市西市民センター

○講師、参加者名（大学側）：西川純

○研修内容

・日程：令和元年8月3日（土）～4日（日）

・参加者数：約300人

・内容の概要

*一人芝居 *講演会 *授業実践の動画を見ながらの分析・解説

*パネルディスカッション *授業実践報告 *模擬授業 等

・拡散内容の概要（講師、発表者の場合）

『学び合い』に関する助言者として、各分科会に顔を出し、質問、相談などを受け付け、研究の成果を拡散した。

・現場の先生との対話的学びの内容

教育現場での喫緊の課題を受け取り、自身の経験を交え、対話的に対応策を模索することができた。

○成果と課題（全体的にどのような学びがなされたか、この研修等の感想、このような研修参加形態の今後の課題等）：

会の冒頭で『学び合い』の考え方についての一人芝居が上演され、考え方を共有した上でそれに基づいた授業実践について、教室での様子を動画で見ながら事例を具体的に知ったり、模擬授業で体験的に学ぶことができた。福岡県や近隣からだけでなく、全国各地から参加者が集まっており、様々な地域や立場の人たちがこれからの教育や子育てについて悩みや願いを分かち合った。また、『学び合い』の考え方や教育実践について理解を深め、理論的背景や実践事例、模擬体験等を通してその有効性や実践上の留意点などを具体的に学ぶことができた。



3 新潟県高等学校視察・授業研究会

○開催日：令和元年9月3日(火)～9月4日(水)

○ねらい：高等学校教育の現場を知り、研究成果を発表し、意見を得る。

○会場：新潟県立新潟工業高等学校、新潟県立新潟中央高等学校

○講師、参加者名(大学側)：片桐史裕 網代涼佑 早川史織 西岡省吾 堀晃大 遠藤学

○研修内容

・日程：

9月3日(火)

10:00 上越教育大学出発

12:30 新潟県立新潟工業高等学校到着

12:34～13:27(4限) 授業参観 電気基礎

13:37～14:30(5限) 学校全体説明

工業高校ならではの進路指導・資格取得等(教頭)

生徒指導、いじめ対策等(新田教諭)

その他学校生活生徒の様子など(教頭)

14:40～15:33(6限) 校舎見学

9月4日(水)

8:30 新潟県立新潟中央高等学校到着

9:00 授業参観 日本史 授業参観

10:00 授業参観 英語授業参観

11:00 研究協議

13:00 新潟県立新潟中央高等学校出発

・参加者数：6名

・内容の概要

工業科高等学校の特色ある授業の参観や実習の見学を行う。工業科高校の就職支援や進路について学ぶ。また、いじめ対策に対する取り組みを学ぶ。新潟県普通科高校の授業を参観し検討する。

・拡散内容の概要(講師、発表者の場合)

各学校で違う高校現場での課題を知り、それに対して研究成果をもとに意見交換をすることで、学校現場の先生方と対話的な学びを行った。

・現場の先生との対話的学びの内容

新潟県における高校生求人の実態を聞き、他県との比較や抱えている課題を知ることで高校生の就職や進路が今後どうなっていくのかを話し合い学ぶ。授業検討をすることで今の課題意識や取り組んでいることを知る。大学で研究していることを比較し考えることでお互いの授業改善につなげていく。

○成果と課題(全体的にどのような学びがなされたか、この研修等の感想、このような研修参加形態の今後の課題等)：

実際に見学する機会が少ない工業科高校の授業内容や実習の様子を知ることで、工業科高校が目指している姿を学ぶことが出来た。就職にむけての取組が普通科高校と比較し、かなり進んでいることを学ぶことが出来た。普通科高校の授業では、実際の授業を観ることで授業改善への取組や悩みを知ることが出来たので、今後の研究につなげていくことが出来る。今回の研修では、座学だけでは学ぶことが出来ない実際の取組について学ぶことができ、非常に勉強になった。今回のような研修形態は積極的に行われていくべきだと感じたが、現場の先生方にとって負担となつては意味がないので、より自然に学校の姿を見るための連携が課題であると感じた。

4 第29回全国産業教育フェア新潟大会 さんフェア新潟2019

○開催日：令和元年10月26日(土)～27日(日)

○ねらい：専門高校等の生徒の学習成果を総合的に発表する全国産業教育フェアを、文部科学省、関係団体等の連携・協力を得て、全国的な規模で開催することにより、全国の専門高校等の生徒の学習意欲や産業界、国民一般への専門高校等の魅力的な教育内容について理解・関心を高めるとともに、新たな産業教育のあり方を探り、新しい時代に即した専門高校等における産業教育の活性化を図り、その振興に資することを目的とする。

○会場：朱鷺メッセ

○講師、参加者名(大学側)：片桐史裕 遠藤学 西岡省吾

○研修内容

・日程：令和元年10月26・27日(土・日) 午前7時～午後6時

・参加者数：約1,000人

・内容の概要

県内・県外の様々な専門高校、専門学科の高等学校や専門学校が集まり学習の成果発表や小・中・高校生を対象とした体験会を開催していた。2日間に渡って開催され、初日は高校生によるツアープランニングコンテスト、2日目には高校生によるプログラミング大会など、各種大会も行われた。

・拡散内容の概要(講師、発表者の場合)

学校連携フィールドワークで連携協力を行なっている高等学校がツアープランニングコンテスト、プログラミング大会、プログラミング体験ブースの3部門にて今回の産業教育フェアに参加したので、引率兼指導員という形で参加した。



・現場の先生との対話的学びの内容

専門高校や専門学科に配属されている教員の方が多く、各学校での取り組みやそれに伴う経験談、成果や苦労話など多くを聞くことができた。また、自分が現場に出た時に行いたい実践や取り組みについてアドバイスをいただいた。

○成果と課題(全体的にどのような学びがなされたか、この研修等の感想、このような研修参加形態の今後の課題等)：

専門高校の教員を目指す立場として、県内・県外の専門高校や専門学科の高等学校の教員と話すことができたことや、各学校の取り組み等を見聞きすることができたことが大きな学びとなった。また、このように専門高校等の魅力や学習の成果を発表する機会をどのようにして小学生や中学生に対し周知させるか、開催される都道府県において毎年課題であると感じた。

5 平成 29・30・令和元年度福岡県筑紫野市教育委員会研究指定・委嘱二日市中学校区 三校合同研究発表会

○開催日：令和元年 11 月 14 日(木)～15 日(金)

○ねらい：iPad を活用した授業分析ツールによる授業分析と分析手法に関する研修

○研修会等名称、会場：コミュニティスクール筑紫野市立二日市中学校・天拝小学校・二日市北小学校

○講師、参加者名（大学側）：水落芳明 黒井浩輔 清水賢志 渡邊和輝 秋山佳樹

○研修内容

- ・日程：13：50～14：40 公開授業
15：00～15：35 全体会
15：35～16：35 講演
16：35～16：40 閉会行事

・参加者数：約 700 人

・内容の概要

3 年間にわたり、中学校区の 3 校がねらいに向かって取り組んだ成果を発表した。発表するまでに 3 校の教頭、主幹教諭、研究主任が定期的に会議を開き、学校全体で『学び合い』の考え方に基づいた授業づくりの在り方について研究を重ね、各学校の実態に合わせて具現化し、作り上げてきた授業の成果を参加者が参観した。その後、その裏付けの理論を講師の水落芳明教授が講演し、今後の方向性を伝えた。

・拡散内容の概要（講師、発表者の場合）

講師：上越教育大学教職大学院 教授・学長特別補佐 水落芳明

「Society5.0 に向けた授業改革」～目標と学習と評価の一体化を視点として～

・現場の先生との対話的学びの内容

院生 4 名は、授業を参観し、iPad を活用した授業分析ツールによってシートを作成した。そのシートを基に授業者と授業のリフレクションを行った。一人の授業者は、春の授業を映像で分析しており、春の授業との比較検討を行った。

○成果と課題（全体的にどのような学びがなされたか、この研修等の感想、このような研修参加形態の今後の課題等）：

研修会の感想

院生は、授業分析シートで見える事実を基に話をし、授業者は授業での心情を話すことで、お互いに気づかなかった視点に気づくことができた。院生、授業者、参観者ともに『学び合い』の考えを共有していることから、お互いに活発な意見を交換することができた。

授業者の先生は「こうやって自分の授業を客観的に観てもらい褒めてもらえてすごく嬉しいです。普段無意識のうちにしている子どもたちへの働きかけをこうやって分類してもらえると、自分の授業を詳しく見ることができてすごく勉強になります。」と、良さを実感し、授業者以外の先生方も「今日の授業で終わりではなく、子どもたちとの学び合いはこれからも続きます。」と今回の研修で終わることなく、次を見据えていた。今回の研修に参加して、現職院生は、日々の教育活動にも還元できる校内研修を在籍校で実施するためにはどうしたらよいかと考えるようになり、学卒院生は、学校現場の教員が校内研修を通して教員同士が関わり、授業力や教育観を深める過程から大学院での実習を見直すようになった。

6 長野県伊那市立東春近小学校校内研修

○開催日：令和元年11月27日（水）

○ねらい：来年実施される『プログラミング教育』について、職員の意識統一とプログラミング教育の可能性について理解し合う

○会場：長野県伊那市立東春近小学校

○講師、参加者名（大学側）：桐生徹 高橋瞭介 桐原一輝 大黒讓貴 芳賀竜一 佐藤吉史

○研修内容

- ・日程：14：40 東春近小学校 着 校長と懇談、打ち合わせ
14：50 会場準備、コンピュータ準備等
15：20～16：50 研修会
16：50～17：20 片付け 学校発

・参加者数：教諭22名

・内容の概要

(1) 講演「新学習指導要領とプログラミング教育の可能性」

(2) 実習「アプリを用いた仮想空間のドローンの飛行ルート」

・三面図を用いドローンの飛行ルートを考える。

・アプリ「3Dドローンプログラミング」を用いて、画面上でドローンを飛行させる。

・飛行結果からルートを再思考する。

(3) 実習「sphero BOLTを用いたプログラミング」

・平面を移動するロボットの動きをプログラミングし、移動させる。

・平面上を動いた軌跡が、L字型と正三角形になるようにプログラミングを行う

(4) まとめ

・拡散内容の概要（講師、発表者の場合）

新学習指導要領の実施に伴い、来年度から実施されるプログラミング教育の授業研修を模擬授業の形式で行なった。特にプログラミングを通した「主体的・対話的で深い学び」の授業提案を行なった。また、空間認識力を育てるための授業の連続性や、プログラミング教育と各教科の接続などカリキュラム・マネジメントについての提案も行なった。

・現場の先生との対話的学びの内容

現場の先生をペアのグループ編成をし、プログラミングをさせた。先生方も児童と同様笑顔が溢れる中、課題の達成に向けて対話を行いながら研修をしていた。機器の使用については個人差が見られたが、大学院生がサポートする中で、円滑に研修が進んだ。先生方は自分たちで課題を解決したい意欲が高く、サポートしすぎない対応も必要だと感じた。

○成果と課題（全体的にどのような学びがなされたか、この研修等の感想、このような研修参加形態の今後の課題等）：

プログラミング教育が持つ「主体的・対話的で深い学び」への可能性を現場の先生方の姿から学んだ。今後現場で教壇に立つ大学院生の立場として、現場の先生方と対話しながら進める実践的な研修の場であり、本研修の意義を感じた。

7 長野県伊那市立手良小学校校内研修

○開催日：令和元年11月28日(木)

○ねらい：来年実施される「プログラミング教育」、「主体的、対話的で深い学び」について、模擬授業を通して研修し合う

○会場：長野県伊那市立手良小学校

○講師、参加者名(大学側)：桐生徹 高橋瞭介 桐原一輝 大黒譲貴 芳賀竜一 佐藤吉史

○研修内容

・日程：9:00 手良小学校着

9:10～校長と懇談、打ち合わせ、会場準備 ※1年～6年までの授業を参観

10:55～12:30 5・6年生に模擬授業実施

13:55～15:30 3・4年生に模擬授業実施

16:00～17:00 片付け、学校発

・参加者数：教諭7名 児童約100名

・内容の概要

(1) 模擬授業(5・6年)

授業のねらい：アプリ「3Dドローンプログラミング」を用い、仮想空間を飛行するドローンの飛行ルートを考えることを通して、空間認識力を育てる。

【前半】

・三面図を用いドローンの飛行ルートを考えさせる。

・アプリ「3Dドローンプログラミング」を用いて、画面上でドローンを飛行させる。飛行結果からルートを再思考させる。

・難易度別で設定されている1から5までのステージの飛行を代表児童に発表させる。

・実物のドローンの飛行を確認させる。

【後半】：前半の授業の発展を示す

・5年生：実物のドローンの動きをプログラミングさせ、飛行させる。

・6年生：平面を移動するロボットの動きをプログラミングさせ、移動させる。

(2) 模擬授業(3・4年)

・模擬授業(5・6年)の【前半】を実施

・拡散内容の概要(講師、発表者の場合)

新学習指導要領の実施に伴い、来年度から実施されるプログラミング教育の模擬授業を行った。特にプログラミングを通した「主体的・対話的で深い学び」の授業提案を行った。また、空間認識力を育てるための授業の連続性や、プログラミング教育と各教科の接続などカリキュラム・マネジメントについての提案も行った。

・現場の先生との対話的学びの内容

現場の先生からは、積極的に授業の内容について質問をいただき、院生自身にとって、先生方へ説明することにより、自分の研究に対する理解が深まる機会となった。

○成果と課題(全体的にどのような学びがなされたか、この研修等の感想、このような研修参加形態の今後の課題等)：

学校現場の教育と大学の研究を往還することの大切さを学んだ。現場でも積極的に研究との橋渡しができる立場として、励みたいと考える。

8 長野県阿智村立浪合小学校校内研修

○開催日：令和2年1月24日（金）

○ねらい：来年度実施される『プログラミング教育』について、保護者・職員との意識統一とプログラミング教育の可能性について理解し合う

○会場：長野県阿智村立浪合小学校

○講師、参加者名（大学側）：桐生徹 高橋瞭介 桐原一輝 松原大樹

○研修内容

- ・日程：11：10 小学校着 校長と懇談、打ち合わせ
11：15～11：35 会場準備、コンピュータ準備等
11：40～12：25 1～6年生にプログラミング授業実践を実施
14：45～16：15 研修会
16：20～17：30 片付け、学校発

- ・参加者数：プログラミング授業実践 児童40名、教諭8名、保護者20名、
村教育委員会2名、一般参加者3名 計73名
プログラミング研修 教諭8名、保護者25名、計33名

・内容の概要

プログラミング授業実践

(1) 模擬授業（1～6年）

授業のねらい：三面図とドローンを用いたプログラミング授業を通して、児童の空間認識力の育成を図る。

- ・三面図を説明し、三面図を用いドローンの飛行ルートを考えさせる。
- ・ドローンの飛行ルートを言語化し、ホワイトボードに記入する。
- ・アプリ「DRONE STAR プログラミング」を用いて飛行ルートを入力し、飛行させる。

プログラミング研修

(1) 講義「これからの学校における子どもの学びと浪合の未来」

- ・桐生教授による講義

(2) 実習「Sphero BOLTを用いたプログラミング」

- ・平面を移動するロボットの動きをプログラミングし、移動させる。
- ・ロボットがステージ上のゴールへと向かうようにプログラミングする。
- ・課題達成できたグループから各自で課題を設定し、プログラミングする。

(3) まとめ

・拡散内容の概要（講師、発表者の場合）

プログラミング教育の授業実践と教員・保護者に向けた研修を行った。全学年40名の児童と行った授業実践は、ドローンを用いて児童の空間認識力の育成をめざした授業を実施した。また、研修では、新学習指導要領で規定された主体的・対話的で深い学びが児童の将来や地域の未来を決める決め手になることを、Sphero BOLTを用いたプログラミング教育で学び方を体験し、Society5.0の社会を地域でいかに実現し、その時に児童がどのような姿であればよいかを考え合った。

・現場の先生との対話的学びの内容

今回は、保護者も参加している研修であることから、保護者と現場の先生が3人程度のグループになり、Sphero BOLTを用いてプログラミングを体験するときに、学生は教師役として、参加者同士が対話的な学びが発生できるように援助していた。例えば、機器のトラブルでは、参加者が困っている姿を感じ取り、さりげなく近くにより声をかけたり、援助が必要な参加者が挙手すれば、すぐ駆け寄り必要事項を聞き対応したりしていた。対話的な学びを促す役を学生が行うというのが今回の学生の役目であり、見事に達成することができたと思う。

○成果と課題（全体的にどのような学びがなされたか、この研修等の感想、このような研修参加形態の今後の課題等）：

子どもたちだけではなく、現場の先生方や保護者の方々も、笑顔で意欲的にプログラミング教育に参加し、新学習指導要領の目指す学び方を体験していた。理論と実践を研修と授業実践で融合するこの研修は、参加者に短時間で体験させることができると考える。学生にとって、現場の先生や保護者と対話しながら進める実践的な研修の場となることから本研修の意義があると感じる。

9 第1回教科の見方・考え方を身に付ける授業デザイン研究会

○開催日：令和2年2月1日（土）

○ねらい：「教科の見方・考え方」を身に付けさせる授業デザインを得るため

○会場：静岡県立駿河総合高等学校

○参加者名：片桐史裕 堀晃大 遠藤学 西岡省吾

○研修内容

・日程 令和2年2月1日（土）13時～16時

・参加者数 17名

・内容の概要

「教科の見方・考え方」を軸とし、授業デザイン、授業目標、課題、評価基準を学ぶ。

・拡散内容の概要（講師、発表者の場合）

子どもにおいて必要なことは、学んだことが生きることであり、将来生きるために必要な力を身に付けることである。そのためには教科で何を学ぶかという「教科の見方・考え方」を子どもたちには身に付けさせる必要がある。だが、受験をどう対策していくかに重点を置いている高校もあり、「教科の見方・考え方」を身に付けさせることが置き去りにされている高校も少なくない。この現状を踏まえ、「教科の見方・考え方」を身に付けさせること、「受験のための学力」は果たして両立が出来るのか。教科、学校種等の違いも越えて語り合いながら考えていきたい。

・現場の先生との対話的学びの内容

教科「現代社会」の授業のビデオを現職の先生に撮ってもらい、そのビデオを見ながら、集まった参加者同士で「教科の見方・考え方」を身に付けさせるための授業デザインの検討を対話的に行っていく。

○成果と課題（全体的にどのような学びがなされたか、この研修等の感想、このような研修参加形態の今後の課題等）

今回話し合った内容は以下の通りである。

・目標の設定

・教科の見方・考え方

・授業のビデオを見て気付いたこと

「教科の見方・考え方」を身につけさせるためには、課題が社会と繋がっていることを子どもたちに実感させることが必要である。また、教科間でも繋がっているものであり、子どもたちがその知識を自分自身の力で結び付けられるようにするのが「教科の見方・考え方を身に付けさせる」ということである。



○研修実施上の課題

日本全国の学校へ講師や大学院生が出向き、授業を参観し、研修で各地の先生方と対話的研修を行うことで、学校の実情を把握し、学校の要請に基づき、様々な形態で実践編研修を実施した。地域によって学校を取り巻く環境は様々で、それらを知ること、様々な要請に応える準備を今後していくことができる。

そして様々な目的や形式の研修会に参加することで、参加した大学院生は、現職教員の学ぶ姿を目の当たりにし、今後、自分が教員になったとき、将来に向けて学び続ける教師を目指すきっかけになったと思われる。

課題としては、旅費が膨大となることであり、予算措置がなされなくなった場合、赴く場所は限られてしまう懸念がある。しかし、これを継続し、研修先が有効性を実感できた場合、旅費を拠出しても講師として招いてくれることで、社会貢献ができる可能性もある。今後も継続する必要がある。

3 連携による研修についての考察

(連携を推進・維持するための要点、連携により得られる利点、今後の課題等)

長野県総合教育センターで実施した対話的研修、事後のフィードバック、全国各地に赴いて実施した出張拡散研修は全て連携している。

長野県の教育事情に基づいた課題に合わせて研修講座を実施した。その受講生のアンケートからもその満足度の高さが伺える。平成 26 年から 6 年間継続して連携を深めて研修講座を作ってきた成果だと思われる。令和 2 年度も研修講座を開くことが決定しており、更なる連携を強めていきたい。

出張拡散研修では、長野県の山間部の小学校を始め、全国各地の学校、民間の研修団体が開催する研修講座に参加し、長野県総合教育センターで開催した対話的研修のノウハウをもとに、改良を加え、講座を開催し、対話的な学びを行った。長野県だけではなく、全国各地の教職員と教員、大学院生が学ぶことができたことは大きな成果と考えている。

ただ、事後フィードバックにおいてのリフレクションがほとんどなかったことは今後改善すべきことで、動画の公開時期、公開範囲も含めて再考する必要がある。

4 その他

[キーワード] 教員研修、対話的研修、動画配信、学級経営、ICT、プログラミング教育、道徳教育、授業づくり

[人数規模]

C. 21～50名

[研修日数(回数)]

A. 1日以内(1回)

【担当者連絡先】

●実施機関 ※実施した大学名又は教育委員会名等を記載すること

実施機関名	国立大学法人上越教育大学	
所在地	〒943-8512 新潟県上越市山屋敷町1番地	
事務担当者	所属・職名	研究連携課・主任
	氏名（ふりがな）	小林 大亮 （こばやし だいすけ）
	事務連絡等送付先	〒943-8512 新潟県上越市山屋敷町1番地
	TEL/FAX	025-521-3665
	E-mail	chiiki@juen.ac.jp

●連携機関 ※共同で実施した機関名を記載すること

連携機関名	長野県教育委員会	
所在地	〒399-0711 長野県塩尻市大字片丘南唐沢 6342-4	
事務担当者	所属・職名	長野県総合教育センター・所長
	氏名（ふりがな）	飯島 由美 （いいじま ゆみ）
	事務連絡等送付先	〒399-0711 長野県塩尻市片丘南唐沢 6342-4
	TEL/FAX	0263-53-8800
	E-mail	webmaster@edu-ctr.pref.nagano.jp